

韓国における日本研究の現状と今後の展望

－時代の流れに素早く適応すべき現状に迫る－

辛 容泰

国際日本文化研究センター客員教授

東国大学校日本学研究所顧問・研究員

A. はじめに

韓国における本格的な日本研究は、1965年に行った、韓日国交正常化締結の以後になる。ちょうど日帝の植民地支配終了から20年後になるが、本考察では、日帝時代の日本研究は考察の範囲から除外する。

しかしながら、35年間にわたる植民地支配の日本語・日本文化の教育は、60年代からの日本研究に多大な影響を与えたことを見逃してはいけない。

現在、韓国内の日本研究は、凡そ90%以上が日本語・日本文学であることに注目せざるを得ない。この現象は、決して望ましいとは言えない。日本を研究するというのが、日本語・日本文学に偏っていることは、今後の韓国における日本研究に、どのように影響され、どのような役割を果たすのかを慎重に考えるべきである。

日本文学の作品の専門家を量産する、日本文学の作家の専門家を量産する、日本語学の専門家を量産する、その窮極の目的は何なのか。

学問の研究の目的の中で、その研究結果の価値性に重点を置くことは、誰も否定できない常識であろう。

周知の通り韓国の日本研究は、世界の国の中で最も盛んな国であると言われているが、日本という国と日本人という人についての研究は、世界中、日本研究を行っている国の中で、割合低い国である

と断定しても過言ではない。

本考察は、このような問題点を抱えている韓国の日本研究の現状を浮き彫りにし、今後の日本研究の在り方について、筆者なりの卑見を述べたいと思う。

B. 60年代以後の研究史

B-1. 日本語日文学科の設置

1961年に、韓国外国語大学に日本語科、62年に、国際大学に日語日文学科が設置され、この両校が、60年代から70年代の前半まで、日本語・日本文学の研究を担い、当時の教授としては、外大では、朴成媛、李允炅、全基定、鄭寅燮の諸氏、国際大学では、楊明文、李鳳福、孫洛範、朴義淑、諸氏で、大部分の方が、植民地時代に日本の大学の国文学科を出た方々である。日本人としては、国際基督教大学出身の言語学者、早川嘉春氏、天理高校を退職した中村利雄氏等が国際大の学部及び、韓国外大大学院の音声学、古典文学等を担当した。

当時としては、主に、教育の面に集中し、学問の研究方法の指導については、殆どと言うほど手が届かなかった状態である。

73年から、ソウル所在の大学を始め各地方の大学に日語日文学科が設けられ、以後、毎年絶え間なく設置が続き、今は短期大学を合わせて、凡そ150を超えるほど全国の大学に設けられている。

B-2. 60-70年代の教育

語学としては、文法（主に学校文法）、文学（主に近代文学）は、作品の読みと翻訳、作者の簡単な紹介が主流を成し、外大では、会話と語学を主に、国際大では、古典と国文学史、詩論、日本語の発音等の講義が特徴であった。従って、両校共、日本語学の音韻論とか語彙論という専門的講義は皆無と言えよう。

73年に、外大に大学院の日本語科が設置され、韓国語の音声学者

の鄭寅燮教授、早川嘉春教授等によって日本語の音声学の講義が催された。大学院でのその他の講義は、学部の講義の域を若干越えた水準であった。

75年から、韓国の大学院の修了者、或いは、ごく稀ではあるが、日本からの修士（博士）課程を終えた人たちが全国の大学の教壇に立つことになった。

大学の教壇に立った教授の出身を分けてみると、

B-2-1. 高校の教師として、政府から日本の韓国系学校（教育院）に2-4年間派遣され、帰国後韓国外大の大学院を修了し、大学の教壇に立った人。

B-2-2. 在日韓国人系、或いは、日本人が韓国学の勉強に韓国に留学し、そのまま日本語・日本文学を担当した人。

B-2-3. 稀ではあるが、日本に留学して修士を取った人。
等であるが、1のグループが大半をしめている。

B-3. 日本語・日本文学・日本語教育の専門家の不足による影響

60年代から70年代の、韓国における大学の日本語・日本文学・日本語教育の専門家の不足は、斯界の研究及び教育に、過去、現在、未来（当分の間）を問わず、その影響は甚だ大きいと言えよう。言うまでもなく、大学教育は、その方面の専門家が担当すべき分野であるが、当時の韓国の事情は、斯界の専門家が殆どと言うほどいなかったことで、専門的な講義を受けることはできなかった。

70年代の後半から、日本の国・公・私立大学等に留学が始められ、本格的な斯界の専門家を養成するに至ったのであるが、ここで、日本語学・日本文学の修学が抱えている問題点は、国内で学部での一般的水準の日語日文学を履修した学生が、日本の修士課程における日本語・日本文学の専門教育を受ける聴講能力の不足である。それを細密に分けると、

B-3-1. 各専攻講座の基礎的な知識の不足である。日本の学

生水準の修士課程の国語国文学の講義を受講し、それを消化するには、余りにもその基礎的知識ができていない。

B-3-2. 各講座の聴取能力の不足。前述の問題点と若干、重なるが大学の学部で、斯界の専門教育を受けていない学生が大学院の高いレベルの専門知識の内容をキャッチすることは無理であろう。

B-3-3. 偏向的な専攻の選択

韓国内の教育の主な講座として、語学では、文法、しかも、学校文法、文学では、作者、作品論が主流をなしている。このような状況に傾いた原因は、綿密な分析なしには断言することはできないが、卑見では、60年代から日本語・日本文学の専門家なしに出発したところで、日本語学では学校文法、文学では文学作品や散文の解釈等である。それは、教える教材をたやすく手に入れられることと、教えることにも割合、容易というのが原因であろう。それで、これらの講義を受けた学生が日本に留学し、専攻科目を選択する場合、それは言うまでもなく、学部で受けた講義との繋がりになるのは当然であろうと思う。

B-4. 韓国における現在の日本（語・文学・文化）研究・教育の問題点

B-4-1. 教育分野

B-4-1-1. 先ず、外国語を教育することとしての大切な事、日本語教育の方法論の研究ができていない。つまり日本語をどう教えるか、どう教えれば効果的かという研究ができていない。詳しくは、大学で初めて日本語を学習する者に対する日本語教育の方法、および、各段階においての教材の水準、内容等、総合的日本語教育の在り方についての研究ができていない。

B-4-1-2. 日本文学を修学する基礎的な学習方法の教育なしに作品の読み下しと解釈で一貫し、日本の各時代における文学の流れと特徴、作者の文学思想の特徴などの分析、韓国、或いは、西洋文学との比較等、このような多様性は、殆ど教育課程に取り入れ

ていない。

B-4-1-3. 専攻講座の偏向。これは国内の諸事情がある。主な理由としては、各大学の事情、つまり、その大学の日本研究(教育)担当者の専攻とか資質によって千差万別である。この事情は、その後の凡そ30年間の日本研究に多大な影響を与えているのが見られる。具体的に挙げると、国内、或いは、日本に留学した学生が、各自の出身大学で教わった教授の専攻を受け継ぐか、その大学の日本研究・教育の流れに影響されて専攻分野を決めることである。

B-4-1-4. 日本語の基本的な発音教育の不足。覚えようとするその外国語が、自分の母語でない限り、その国の人と同じく、発音を要求することは無理であろうが、しかしながら、少なくとも、自国語の発音との比較で、基本的な両語の特徴を掴むことは、たいへん重要な教育課題である。

韓国の日本語教育は、これが欠けているのが目立つ。その理由については、このような講座を担当する教授が殆どいない事情による。

B-4-1-5. 基礎的な日本文化、その中でも、日本の歴史、日本人の生活・習俗・地理、日本人の心理的特徴、生活上の働き先(業態)等を簡単に紹介する講座等が殆ど教育課程に設定されていないことは、韓国の日本研究の特徴であろう。勿論、斯界の専門家がいる大学では例外である。

B-4-2. 研究分野。この問題は、後の項で詳細に提示されるが、日本関係研究者が2000人を越えるほどの多大な人力が、日本語・日本文学に集中している現象は、世界中のどの国にも見ることができない。これは、国家的においても、外国研究の人力の浪費であり、非生産的と言えよう。

C. 今後の展望

C-1. 日本研究の不均衡の改善。まずは、大学の既存の日本語科、日語日文学科という科名を日本学科、或いは、東アジア地域学

科という名称に変えること。これは、言うまでもなく、今後の国際関係の研究動向に沿った名称である。日本では、国際関係学科という名称が諸大学に見える。それで、研究及び教育分野においても、今日の国際情勢の流れに適した研究と教育をするに相応しい‘カリキュラム’を設定すること。

C-2. 日本学の教育課程の設定

全国の大学に教育課程を統一して設定するということは、いろいろ問題がある。その主な理由は、それらを担当する専門家の不足である。とは言え、なるべく早く改善すべき問題で、筆者なりの教育課程を出して見ることにする。

ここで、学年に相応しい内容においては、各大学の事情に任せることにする。

C-2-1. 日本語の発音。(音声)

C-2-2. 一般的文章の理解のための基本的な文法。

C-2-3. 文章講読。初、中、高級別。教材の選択は、なるべく、日本、日本人の一般の生活を表したテキストを選ぶこと。

C-2-4. 日本語の会話。この課程は、専攻科目の課程に入れるか、若しくは、大学全体の学生向きの課程として設定するかを考える必要がある。

C-2-5. 日本の漢字語の読み方。日本、韓国の両国において、日々どんどん増えつつある漢字語の読み方、日本漢字音を容易に読めるその規則性を利用した方法を中心に、講義すること。

C-2-6. 日本人の家族構成、生活(暮らし)の様相。

C-2-7. 日本の小説。

C-2-8. 日本の詩歌。

C-2-9. 日本語の生活(表現)語。(年令別、性別)

C-2-10. 日本語の音韻。(音韻史)

- C-2-11. 日本語の文法。(文法史)
- C-2-12. 日本文学史。
- C-2-13. 日本の歴史。(歴史、民俗、慣習、祭り、歴史的行事等)
- C-2-14. 日本の地理。(気候、地形、交通、地方別特徴等)
- C-2-15. 日本の経済。(伝統産業、中小企業等)
- C-2-16. 日本の政治。(内閣責任制政治形態、政党政治等)
- C-2-17. 日本の宗教。(神道、仏教の宗派、キリスト教等)
- C-2-18. 日本人の食生活。(一日の一般食事、好きな食べ物等)
- C-2-19. 日本人の余暇生活。
- C-2-20. 日本の科学技術分野の研究動向。

以上、今後、日本学科で講義を行う教育課程を筆者なりの考えで提示してみたが、その他にも補充するものが、いろいろあると思われる。

その他の諸問題点とか、提示したいことは、結論の項に譲ることにする。

D. 結論

過去、日帝の植民地時代、自意半他意半、韓国から様々の分野に留学した人が意外にも多かったことは、周知の通りであるが、しかし、日本語・日本文学の方面の留学生は、他に比して殆どというほど居なかったと言える。とは言え、大部分の留学生は、非専門的ではあるが、日本語の会話、読む、書くという一般的な面では、高い水準と言える知識人が国内に散在している事情である。

1945年の植民地解放以後、僅か20年後に、早々、韓日国交が結ばれた。数年後、全国の大学では、日語日文学科が雨後の竹の子の如く設置され始めた。いきなりのこの現象によって、問題にぶつかったのは、斯界の専門家の不足である。不足というよりも不在と言ったほうが的確と言えよう。

このような状況で、大学を出た学生が、80年代の前半から日本に

どんどん留学し、その大部分は、修士を取って帰国、最近は、博士号を取った人もぼつぼつ出始め、全国の大学の日本関係学科に勤めているが、その大部分は、日本語か日本文学の専攻が主流を占めている。それも、語学は文法を主に、文学は作者か作品論が大半を占めている。このような傾向は、寡聞かも知れないが、世界中、どの国にも見当たらない。それで、今の現状に鑑み、今後の国際情勢の流れに応じた日本研究・教育の在り方を中心にして、どういう方面を改善し、どういう分野を新しく開設すべきかを提示してみることにする。

D-1-1. 基礎的な日本語をどう教えたら効果的かという、日本語教育の方法論の方面に関心を寄せる必要がある。例えば、大学の1-2年生の学生にどう教えたら、日本語・日本文学をより効果的に習得させるかという、教育方法の研究に関する考察が殆ど見当たらないことは、日本語を教えている教育現場に立っている人として、ぜひ再考すべきことであろう。

D-1-2. 日本語（東京方言）の基礎的な発音教育の強化が必要である。これには、その方面の専門家が必要であるが、非専門の場合は、ぜひとも研修を受けるべきであることを勧めたい。何を専門にしても自分が話す日本語の発音は、そのまま受講者に多大な影響を与えることを考えると、是非とも研修が必要であろう。

D-1-3. 講義室内では、全学年において、日本語の会話の講義は言うまでもなく、全講座の講義をなるべく日本語で行うことを原則にすること。1年生の場合も、なるべく原則を守りながら、場合によって、若干のゆとりも考慮する。それに加えて、平素の学生との話し合いにおいても、なるべく日本語で話し合うという方針をきめておく必要があるだろう。これは、受講者の日本語の会話の進展において、多大な影響を与えると筆者は信じる。

D-1-4. 勉強会（小研修会）を設け、研修を行う必要がある。日本研究を担当する教授は、所属の学会とか、研修会等で、その方面の専門家を招き、研修を行うとか、近隣の大学同士の勉強会を設

けて、専門の学際的研修を行うこと。

D-1-5. 論文は、なるべく日本の全国的な諸学会で発表し、日本における斯界の専門家の評価を受けること。

D-2-1. 日本研究・教育の今後の在り方

D-2-1-1. 先ずは、既存の日本語・日本文学の専門家は、徐々に日本学的な専門家に變えることが要求される。現在の日本研究の殆どが、日本語・日本文学に偏っている問題は、学問の国際化、多様化（グローバル化）という流れにとっても望ましくない。

尤も、国益という立場で考えても、いち早く改善すべき問題である。自国語、自国の文学にしても、このような専門家を量産することは、今の国際情勢の流れに逆行であろうと思う。それに、このような多大の人力、少なからずの経費等を投資して、毎年多数の日本語・日本文学の履修者を輩出することは、国家の未来を考えても、冷静に再考する必要がある。

D-2-1-2. 専攻を變えることについては、一気に今までの専攻を變えることは容易ではないが、語学と文学はその国のあらゆる方面の出来事と深い関係がある分野であって、自分に適した分野を選択し、その變更に計画を立てて徐々に研修すれば、あまり難しい問題ではないと思う。

筆者の経験を紹介すれば、修士論文が中世文学であったが、75年当時の日本語教育の現場で、中世文学を教えるということは、余りにも現場の状況に相応しくない専攻と判断し、現場の受講者の要求、日本関係の専門家の意見等を参考にして、韓日漢字語、漢字音の比較研究－日本語の漢字を容易に読める方法を中心に－に専攻を變えたのであるが、その後の30年近くの教壇生活を振り返って見ると、その判断が全く正しかったと思う。一方、数十人の教え子等の日本留学の案内においても、日本語の漢字音、音声、音韻論、言語学等で、韓国内の日本学界では稀少の分野でもあって、斯界の研究に大活躍をしているのが見られる。

D-2-1-3. これからは、日本学的研究の専門家を輩出し、徹底的、且つ、日本の隅々までの日本学の専門家が量産されるよう指導を行うことに力を入れる必要がある。今の韓国内では、日本語・日本文学においても、周知の通り、日本人の斯界の専門家に比して、もう少し力を入れなければならない。それに、その他の日本に関する、いわゆる日本学研究の事情は、例えて言うと、小学生であろう。

従って、今後の韓国における日本学の専門家を養成するには、高校の日本語教育の担当教師から大学の日本研究の教授に至るまで、日本研究の専門家を志す学生等には、‘日本のあらゆる方面の真の姿’を研鑽するよう勧める必要がある。

参考までに、日本の韓国学研究においては、相当の分野で、韓国の学界を凌ぐほど徹底的、且つ綿密に研究されているのが窺われる。

D-2-1-4. 結びとして、筆者は30年前、漢字音を研究して以来、その元になる漢語の音韻論に目を向け、その祖語と言える甲骨文、上古漢語等を分析したところ、その文字の中には、東アジア（中国、韓国、日本）民族の言語、文化、習俗等が秘かに内在していることを発見した。以後、かつて大陸で長らく、且つ巨大な王国を築いた高句麗と高句麗系（扶余、高句麗、百濟、伽耶等）の言語を考察し、国内外の諸学会に報告したのであるが、ここで、最も筆者の胸を打ったのは、‘高句麗語の数詞と日本語の数詞が同一である’ことを発見した日本の歴史地理学者、内藤湖南（本名は、虎次郎）、‘郷歌及び吏読の研究’に関する分野の大学者、小倉進平、‘朝鮮漢字音の研究’に力を入れた斯界の権威者、河野六郎諸氏の研究である。外国の学者が、異国語、しかも難解の古代語を独学で研鑽し、立派な学問を確立したことに、真に尊敬の意を表したい。

尤も、高句麗と日本語の数詞の一致という現象は、印欧の比較言語学的見解から見ても、斯界の諸学者の目を惹く現象である。

よって、筆者の卑見では、今後の日本学関係の分野に目を向けて研鑽を願う若手研究者は、是非とも日本だけではなく、大陸を含めた幅広い範囲に目を向けて研鑽すべきことを願いたい。

筆者も遅ればせながら、余力がある限りこれからも続けて、昔、黄河下流地帯で、東アジア（漢、韓、日）の文化の源を築きあげた、商（殷）及び東夷の活動舞台である大陸を学問研鑽の対象にして勉強に励みたいと願っている。

21世紀に至って、学問の分野は言うまでもなく、あらゆる方面においてもものすごいスピードで変わりつつある。この状況を見逃してはいけない。尤も、現代の人間社会において、学問の研究は、国の興亡盛衰を決める最も重要な機能を抱えていることは、周知のごとくである。

特に、筆者の今回の日文研の客員教授として、世界諸国の学者と様々な共同研究会に同参した経験は、今までの狭い視界から、幅広い視界に繰り広げられた視覚の拡大が、何よりも、今後の筆者の学問の大切な導きになると思う。

1800年代の後半、韓国が日本に比して、開港が30年遅かったことによって、近年の韓国の歴史を産んだという、未来学者の意見を無視してはいけない。しかも、21世紀のあらゆる方面の動きは、かつてのどの時代よりも早い。よって、それに合わせて、いち早く適応すべきが何よりも大事であることを再三強調しつつ、筆者の率直な卑見を終わらせて頂きたい。

今回、日文研の企画で行った「コリア・シンポジウム」は、今後の韓国における日本研究に多大なる貢献を与えることを確信し、このシンポジウムにおいて、その企画から終了に至るまで、始終、綿密な行事の進行とお世話を下さった鈴木貞美教授を始め、海外研究交流室、及び研究協力課の皆さん方、関係者諸氏に心から感謝の意を表したい。

付け加えながら、拙論を脱稿してちょうど1年になるが、その間の世界情勢の変動は、ものすごい。“意識を日ごとに変えなければ…”という未来学者の頂門の一針が今更耳を打つ。

※ 本考察は、2001年2月9日から11日まで、国際日本文化研究センター

で行った「コリア・シンポジウム」の研究会で発表した内容を若干変更補充した論文である。